カタルーニャ・クロッシング

カタルーニャと日本。人や企業、そして芸術、生活がクロスする現場を探ります。

第23回 清水 建宇（たてお）さん　元朝日新聞記者、編集者

「バルセロナで豆腐屋になった」

今回は4月19日の「サン・ジョルディの日」イベントで行われた清水建宇さんのトークショーをご紹介します。清水さんは朝日新聞社定年後、バルセロナで豆腐屋をはじめるという体験を本にまとめられました。編集委員時代は久米宏さんの「ニュースステーション」でのコメンテーターもなさっていました。

AMICS 清水さん、今日はよろしくお願いします。まずは定年後の人生をなぜバルセロナで暮らそうと考えたのか。そのあたりからお聞かせください。

清　水 定年後、どう生きるか？　おそらく多くの方は仕事、あるいは趣味から考えると思うんです。でも、私は違うんです。「どこに住むか」がいちばん大事。高校時代からそう思ってきました。私は札幌出身です。高校生のとき、花森安治さんの「暮しの手帖」で「新日本紀行」という連載を読みました。第一回が札幌で、「東京との結びつきばかり自慢する街、開拓者魂はないのか」とひどい書かれようでした。二回目は神戸でした。「なんて素晴らしい街だ。東京で流行っているからといっても見向きもしない。自分たちのファッションを守っている。本物の国際都市だ」などと神戸を褒めちぎりました。それを読んで、神戸に住みたいと思い、大学は神戸大学へ進みました。都市というものは歴史の積み重ねの上にあって、そこで暮らすということは、毎日その歴史を感じ、歴史を呼吸することです。神戸の生活で、住む都市とその歴史が与えてくれるものが大事だと実感しました。どこに住むが大事だと、頭の中に刷り込まれたんです。

新聞社で長く担当した事件記者の現場から、いきなり日曜版の「世界名画の旅」担当にさせられて、1年半の間に15カ国、21都市をまわりました。40歳の時です。仕事を終えて、どの都市がよかったかを考えました。バルセロナがダントツ1位です。他の都市では「アジアから来た変なやつがいる」という視線を感じたのですが、バルセロナではそれが一度もないんですよ。緊張せず、リラックスして街に自分が入っていける。ニューヨークは人種のるつぼって言いますよね。でも人種ごとのブロックになっているだけで、溶け合っていません。バルセロナでは住民も異国からの旅行者も溶け合っていて、「アジアから来た変なやつ」という奇異の目線を感じない。

日本に帰ってから、どうしてだろうと考えました。田澤耕先生の本も繰り返し読みました。歴史を紐解いて、私なりに考えたのはこういうことです。

カタルーニャでは13世紀に早くも身分制議会が作られ、のちにバルセロナでは百人議会になります。バルセロナは自治都市になっていきます。日本では鎌倉幕府の時代ですよ。商人、職人が力を持ち、自治がカタルーニャの伝統になっていく。そしてスペインではカタルーニャとバスクでだけ産業革命が起きます。資本家が登場し、経済的な豊かさの下で芸術が花開きます。中でも建築は絵画とは違って金がかかる。資本家がいたからガウディの建築があるんです。話を続けますがいいですね？

みなさんもご存知のとおり、スペイン市民戦争が起きます。バルセロナは共和派の拠点でしたが負けました。フランコの軍事独裁下でカタルーニャは弾圧されます。伝統的な行事は禁止。カタルーニャ語も禁止。使ったら逮捕、投獄される。今日は「サン・ジョルディの日」のイベントですが、「ジョルディ」はカステリャーノでは「ホルヘ」になっちゃいます。言葉と名前を奪われる苦痛、これが35年間続きました。ほんとうに残酷な出来事です。やっと民主化が始まっても、人々はこのことを忘れない。弾圧を生き延びた人は、若い人に語り継ぐ。私が最初に訪れた時、サグラダ・ファミリアを取り巻く巨大な横断幕がありました。「旅行者よ覚えておいてくれ、カタルーニャはスペインではない」と書いてありました。カタルーニャの人々は法律上はスペイン国籍です。でもその国籍を好きになれないから、異国から来たひとたちとの境界が薄れていく。だから私を奇異な眼で見ないのだろうと思い至りました。バルセロナはこうした歴史が生んだ「奇跡の都市」なんですね。

第二の人生はバルセロナに住もうと決めました。問題は、私の大好きな豆腐、油揚げ、納豆、ガンモがないことです。ならば自分でつくるしかない。いくら考えても答えは一つ、バルセロナで豆腐屋になることでした。

AMICS いわゆる第二の人生を「どこに住むか」からはじめる。なるほど！と思いました。選択されたバルセロナですが、実際住まわれてみていかがだったのでしょう。

清　水 はい、結論を言うと、想像していたよりずっと素晴らしいです。まず気候が素晴らしい。夏はクーラーがいらない。地中海の水温は低く、その上を吹いてくる風が入ってくる。そして街のどこを歩いても街路樹と木陰がある。冬はストーブを使わない。そもそも温度が下がらないし、レンガの建物は日中の熱をじわーっと蓄えるんです。次に食料が豊富でおいしい。野菜が安い、果物が安い。カミさんは毎日、果物屋によって果物を買いました。こんなこと日本ではできない。缶ビールが45円！　消費税しかかからないからです。日本のビールは税金を飲んでいるようなもんです。ワインも安い。お米も安いものは1Kgが150円ほどでした。

そして外国人へのまなざしです。差別どころか日本への評価が余りにも高くて、戸惑うほどです。年配者は日本の工業製品が素晴らしいというし、若者は日本のアニメやマンガが大好きです。私が行く2年前の総選挙で、社会労働党の党首サパテロさんは「日本を見習おう。国民は勤勉だし、教育熱心である、その二つともスペインにはない」といったそうです。日本人だというだけで尊敬されています。

「スペイン」あるいは「マドリッド」への対抗心が強いことも予想通りでした。その典型はサッカーです。バルサが点を入れると街のどこにいてもわかる。「やったぞ、マドリッド、ざまぁみろ！」ってね。とにかく想像していたより面白いです。

AMICS 暮らす前に予想していたのと違ったことはありましたか。

清　水 一つだけあります。私が豆腐屋を開いた2010年の国民一人あたりGDPは、日本が世界で14位、スペインは39位でした。日本は豊かで、スペインは貧しいのだと思っていました。しかし、暮らしぶりを見ると、バルセロナの人たちは余裕があるし、楽しそうにしている。なぜなのか考えて、住宅の違いだと気が付きました。スペインの建物はレンガや石造りで、100年も200年も持ちます。住宅ローンの支払いは曽祖父の代で終わっていて、あとの世代は相続税とメンテナンス費用だけを払っていけばいい。一方、日本では３５年ローンを払い続け、その家で死ぬ頃には法定耐用年数がくる。子供たちは新たな住宅を買い、また住宅ローンを払い続けて死んでいく。家が消費財であって、資産ではないからです。日本では、高速道路などの社会資本も貧しい。スペインでは高速道路の償却が済むと無料になる。こういう「資産＝ストック」の違いを考えると、日本はちっとも豊かじゃないんですね。

豆腐屋開業から14年後、2024年の一人あたりGDPを見ると、スペインは37位で、39位の日本を追い抜いてしまいました。スペインは変わっていないのに、日本が大きく落ち込んだからです。「勤勉と教育熱心」はずっと続けてきたはずなのに、自滅しています。日本の政治家は「スペインを、バルセロナを見習え」といったほうがいい現状です。

AMICS そのお住まいですが、バルセロナではユニークな住居だったのですよね

清　水 店の周辺を歩き回って見つけました。後期モデルニスモを代表する建築家サイラッチが家族のために建てたビルです。バルセロナ市の文化財に指定されています。広さは130㎡、ゆったりとしたリビング、広い主寝室の他に客用の寝室が二つ、玄関だって6畳くらいある。場所は、東京でいえば渋谷区松濤でしょうか。それが月額家賃1500ユーロでした。写真にあるレトロなエレベーターは100年前のものです。モーターやケーブルは新品ですが、アール・デコ風の古い木製ゴンドラは昔と同じです。

サイラッチハウス・エントランスとエレベーター

AMICS おそらく今日はバルセロナにはすでに旅行でいらしたことがある、あるいは学校や仕事で住んでいたことがあるという方もいらっしゃると思います。最後にバルセロナ、カタルーニャに11年間暮らされた清水さんからアドバイスをお願いします。

清　水 バルセロナはとてもいい街ですが、カタルーニャはバルセロナだけではありません。ぜひ近郊の小さい街や村を見に行かれることをおすすめします。バルセロナで出会った方々に「田舎の別荘」を持つ人がやたらといました。相続した家が別荘になっているんです。こうした田舎を訪問したことが、カタルーニャを理解することに役立ったと思います。地域の歴史を知るには、観光旅行ではダメです。せめて1ヶ月、市場で買い物をして、自分で料理をして暮らす「ロングステイ」をしたほうがいいですよ。バルセロナから電車で30分くらい離れた郊外だと、家賃も安いです。

会場から カタルーニャの方の豆腐との付き合い方に変化はありましたか。

清　水 サラダにして食べる人が多いと思います。オリーブオイルと塩をかけて食べる方も。日本食レストランで揚げ出し豆腐を食べ、私の店に「揚げ出し豆腐を買いたい」という客がけっこう来ました。「それは自分で作るんですよ」とアドバイスしました(笑)。豆腐屋はいま茨城県取手市にある染野屋さんが引き継いでくれています。

バルセロナで圧倒的に多いのは、相変わらずカタルーニャ製やドイツ製のかまぼこみたいな堅い豆腐です。スライスしたり焼いたりして食べるそうですが、それもヨーロッパ流の食べ方なんでしょうね。いろんな豆腐との付き合い方があってもいいと思います。

【AMICSの眼】

清水さんの著書には～定年後の「一身二生」奮闘記～のサブタイトルがあります。初めて知った言葉ですが、まさに膝を打つ思いがしました。いつでも「仕事」から考えてしまう習性のまま第二の人生を迎えがちな時代です。是非ご一読をおすすめします。

清水さんのサイトは「一身二生倶楽部」です。「一身二生」で検索してみてください。

（取材／文　原正彦）

サン・ジョルディのイベントでの著書へのサイン会